

平成28年度愛知淑徳大学人間情報学部講演会 演題 『絆で結ばれる社会へ：人口最少県の挑戦』

演者 鳥取県知事 平井伸治*
司会 人間情報学部 天野成昭**

【司会】 本日は、第1回人間情報学部講演会として、鳥取県知事、平井伸治氏をお招きし、ご講演していただくことにしました。

最初に、学部長からご挨拶をお願いいたします。

【学部長】 みなさん、こんにちは。今日は、待ちに待った平井・鳥取県知事の講演会となって、みんなワクワクしていると思います。

平井様、本日はたいへんご多忙の中、遠路お運びいただきまして、まことにありがとうございます。今日は、1年生の学生がほとんど出席いたしておりまして、入学式すぎて当時から、たいへん今日お目にかかるのを楽しみにしているような状態でございまして、しっかり勉強すると思いますので、本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

【司会】 メモをとる準備はできましたか。

では最初に少しだけ、知事のご紹介をいたします。

今日は、タイトルが「絆で結ばれる社会へ——人口最少県の挑戦」というお話です。

さて、平井知事ですけれども、1961年、東京は神田の生まれです。1984年、東大法学部をご卒業になり同年、自治省（現在の総務省ですね）、ここに入省されました。そして選挙部・財政局・税務局等の課長補佐を務められ、1996年にはアメリカのカリフォルニア大学に派遣されまして、客員研究員という立場で研究されていらっしゃいました。この間、兼務でございまして。1999年には、鳥取県総務部長。県庁ですね、県庁で総務部長を務められ、2001年には鳥取県の副知事、そして2007年から現在まで鳥取県の知事を務めていらっしゃいます。現在3期目になります。1期4年で、3期目10年目です。

11年目ですか。それぐらい長きにわたって務められています。

平井知事は私の大学時代の知り合いでございまして、そこからちょっとだけ紹介させていただきたいと思います。まずなんといっても笑顔です。非常に満面の笑顔でいらっしゃいます。それから、思いやりの心。これも深い思いやりの心でいらっしゃいます。ちなみに、この笑顔はお母様ゆずり、思いやりの心はお父様ゆずりと聞いています。そして、なにより儉約家です。出張に行きます、という時は自分で安いビジネスホテルを予約して泊まっていらっしゃいます。また、ファーストクラスで海外出張なんて行ったりしません。大名行列みたいに、20人も30人も連れていかないです。1人で行かれる。こういう特性をお持ちで、みなさんから非常に厚い信頼を受けていらっしゃいます。

エリートとして、非常に明晰な頭脳と抜群の行動力を持っていらっしゃいます。これによって、非常に優れた情報発信を行われています。ダジャレ、それからコスプレ、パフォーマンス。それは、みなさん見たこと、聞いたことがあると思います。テレビ等マスメディアへの出演なども見たことがあるかと思えます。マツコ・デラックスの絡みもありました。

じゃあ、このダジャレとコスプレとパフォーマンス、少しだけ見てみましょうか（写真 省略）。

これは有名な言葉です。「スタバはないけれど、鳥取には日本一の砂場がある」とおっしゃいまして。言葉はいいんですけれども、なんでこんな格好をする必要はないんじゃないかとは思いますが、これも情報発信の1つの形式です。

* 鳥取県知事

** 愛知淑徳大学人間情報学部

これは2015年5月23日に鳥取県に、ついにスターバックスの1号店が開店しましたという時に、そこに行きまして、わざわざこんな格好をしまして、「キャラメルマキアートはいかがですか」というふうに提案しているところです。むこうの社長は「そんなことはできません」とか言ったとかいうんですけども、こういうこともやっています。

これは六角精児さんと東京駅で、梨の超特急「新甘泉」という、鳥取の名産の梨を宣伝した時の、車掌のコスプレをしてですね、「出発進行」みたいなことを言っているわけです（写真 省略）。

これは若桜鉄道。ピンク SL というのを走らせて——もう終わりましたね。そのお披露目式で、わざわざピンクのスーツを着て、SL に合わせまして「出発進行」ならぬ「出発ピン行！」……どうも、このオヤジギャグにはついていけないところがありますけれど、そういうこともなさっています（写真 省略）。

こういう、ちょっとふざけたようなことをやっているばかりではなくて、これは全国高校生手話パフォーマンスが米子市で開催された時に、秋篠宮ご夫妻の次女・佳子様をエスコート時の写真です（写真 省略）。

非常に、知事は多忙です。ですが、それにもかかわらず、時間をさいて本学に来ていただきました。非常に貴重な時間、おそらく二度とないかもしれない。みなさん、しっかりとお話を聞いていただきたいと思います。では、平井知事さん、よろしく願いいたします。

〔平井伸治 氏〕

みなさま、こんにちは。鳥取県知事の平井でございます。どうぞよろしく願い申し上げます。今日は、この美しい愛知淑徳大学のキャンパスにおじゃまさせていただきまして、ほんとうに感激の思いであります。また、こうしてみなさまのフレッシュなお姿を拝見していますと、大学にいたころの自分を思い出し、何か胸が熱くなるような思いがいたします。

この講義をさせていただくことになりましたけれども、これにあたりましては、三和義秀学部長様、また天野成昭先生、さらに森博子先生はじめ本学のみなさまにたいへんお世話になりました。とくに、

この橋渡しをしていただき天野先生には、私もひとかたならぬお世話になっておりまして、とっても断れずにここにやって来たという真相でございます。そんな意味で、ちょっとの時間ではありますけれども、みなさんにもぜひ——今日は新入生の方が多いとうかがっております。そういうみなさんに、これから自分の人生、どういうふうに描いたらいいのかな。それから人との絆を築くことの大切さ。鳥取県は全国で一番小さな県で、最小県になりますけれども、そういう所でどうやって頑張れるか。そんなことでもがいている姿も、少し感じていただきまして、この話の終わりごろには何かそれぞれ思いを持って帰っていただければ、ありがたいなあと思います。

今、ちょっと私も驚きましたけれども、天野先生がずいぶんネットでサーフィンされたみたいで、私のギャグを全部言ってしまいましたから、だいたいギャグを半分に分ったほうがいいかもしれませんけれど（会場笑）。

そんなような形で、みなさまにもお付き合いいただければなあと思います。

最近、ちょっと顔が売れてきたかもしれません。先ほどの話を聞いていただいても、天野先生の画面を見て、「ああ、見たことあるな」というような顔をされた方がいらっしゃいました。そのとおりでございまして、あの「平井」でございまして。

一番最近ワーワーやったのは、スターバックスのコーヒーのことであります。その前に、実は伏線がありまして、マツコ・デラックスさんという今人気の方がいらっしゃいますけれども、あのマツコさんが東京のローカル番組で、こういうふうに言ったんですね。「鳥取は人口最少県で悲しい。なんとかしてあげたい」ということを、テレビの番組でおっしゃったんです。私のほうで、ちょっとかまってあげまして、「ぜひマツコさん、鳥取に来てください。招待します」と言ったら、それはまったく無視されたんですけども（会場笑）。その後、若干いろんなところでお会いをさせていただいて、番組にも出させていただいたことがあります。

『月曜から夜ふかし』というのは、中京圏でもやっているんですかね。あの『月曜から夜ふかし』に出させていただきまして。あれは、いい加減な番組で

したね（会場笑）。まったく取材もないですよ。それで私がスタジオに入りましたら、スタッフの方が来られまして、「平井さん、お願いですから、来ていることはバレないようにしてください」——。マツコさんとそれから信五ちゃんには知らせてないよ、と。よくフリップで「だれだれ来てます」とやって驚いているのは、本当だと思います。私が出ていくことも、ぜんぜん知らせずにまいりまして、出かけていったわけでありまして。そうしたら、出てみるといろんなことを番組で、かまってくるわけですね。だいたいあの番組は、地域の特性として、「山口はブスが多い」ですとか、そんなようなことを取り上げて、あることないことやっているわけでありましてけれども……。鳥取に来て、Vは撮ってありました。私が出る直前のところ、私も知らないのですけれども。その時、初めて見るのですが、どうも番組の取材陣に取材されまして、「鳥取はこんな町ですよ」と最初に映るんですね。若いカップルなんか、いっぱいやってくるわけです。それに順番にインタビューをやっている様子で、「デートはどちらに行かれるんですか?」「イオンです」（会場笑）これが鳥取でして、みんな「イオン鳥取北」というんですね。

さすが中京圏は、たくさんイオンがありまして、すごいなあ。スタバもあるし、コメダコーヒーもあるし……。

そのようなことでありまして、こんなようなことをさせていただいて、だんだんと鳥取を売り出していくということです。なにせ東京中心のメディアですから、私のようなお金のない所——カニはいるけど、金はないんです（会場笑）。ですから、その中でどうやって売り込むかというのが、けっこう難しくて……。

皆さん、あまりメモとるところがないでしょう（会場笑）。気楽に聞いてもらったらい。安心してください、さっき三和先生にうかがいましたら、今日はテストはないそうでありまして、出席点だけだそうでありますから。ぜひ気楽に聞いておっていただいたらいいんですが。

そんなようなことで、鳥取県としてどんなことを売り出したらいのかなあ、ということを見せていただいたところでございます。

でも、それをやっているのは何故かという、鳥

取県をなんとかしたいと思うからですね。地域を良くしたい。非常に純真な、自分自身の思いがありました。それは、学生のころ赤十字のボランティアをやったことがあるんですが、何か人の役に立てるような、そんな生き方ができないかなあ。それを自分自身でボンヤリと、皆さんのころは考えていたものであります。そういう時に試験を受けて、国家公務員になったわけでありまして、その時、いろんな所に赴任したんですね。今は鳥取におりますけれども、最初は東京にある自治省に入りまして、そこから兵庫県、それからまた福井県とか鳥取県。さっき、外国の話もありましたけれども、外国にも行かせていただいたこともあります。

その仕事に就いたのは、地域に行き、その地域の人たちと一緒に、いわばその土地を良くしたい、人々の幸せが少しでも大きくなればいいな。それに、自分としてもできることがないだろうか。そんなことを考えながら、入ったわけですね。2年間、ちょうど大学出たてのころには兵庫県に行っていました。ぜんぜん知らない土地です。その知らない土地にまいました。もちろん役所、県庁の中で働いて、市町村のお手伝いをしました。たとえばスキー場を作るとか、そんなようなお手伝いをしました。

それからプライベートでは手話の教室、ボランティアグループに入りました。そこで、手話を少し勉強し始めたこともございまして、そういう友だちもできたわけでありまして。

その時、2年間経ちまして、東京にまた赴任で戻るとい——新神戸の駅から新幹線に乗って帰るわけでありましてけれども、その時に職場の方々から聞かれました。「平井ちゃん、何時の新幹線に乗るの?」と言うんですね。この時間の新幹線に乗りますよ、というふうに申し上げました。それで家へ帰りまして、引越しのための片付けをして、トラックで送り出して。切符を持って、実際にホームに向かいます。そうするとホームの、自分が行くあたりに、何か人ごみがあるんですね。何かなあと思ったら、それは自分が——誰も知らないのに神戸に赴任して、その時に職場で知り合った人とか、あるいは正直言って呑み屋のお母さんたちもいましたし、それからいろんな友だちも出てきていました。ちょう

ど夕飯時だったものですから、平井は食いしん坊だとみんな思っていたみたいで、お弁当が集まったんですね。みんな、「これ食べて、平井ちゃん」と渡してくれる。それで、お弁当が5つも集まってしまって食べきれないぐらい。そんなお弁当を両手に持って、「みなさん、ありがとう」と言って、新幹線に乗り込んだわけです。

何より自分でも驚いたのは、聾の人もいたんですね。耳の聞こえない人。耳が聞こえない人は、電話では伝わりません。ですから、間に人が入って「今度、あの平井が東京へ帰るから、見送りにいこうよ」といって誘ってくれた人がいたから、そういう人が出てくるわけですね。まだ、みなさんぐらいの年齢の時です。その時に、そんな体験をして、涙が流れる思いがいたしました。

人生というのは、そういうもんだと思うのです。自分が信じた道をぜひ進んでいって、自分の目標としたこと——本学に入られて目指された道があると思うのです。たとえば、情報のデザインやシステムを学ぼう。また、これから図書館や情報、そういうことをやっていこう。そうした様々な思いがあって、こちらのほうに来られたと思います。また、コミュニケーションをとることの大切さ、そんなことを学んでみよう。そして、人間の心の仕組み、そういう心理ということもやってみよう。そうやって、みなさんは入ってこられたんだと思います。それをぜひ大切にして、勉強は勉強で一生懸命やりながらも、いい友だちを作っていくてください。そうすれば、きっと道は空けるような思いがいたします。

私は、このたび熊本に行ってまいりました。益城町という所です。益城町は震度7の地震が2度もありました。鳥取県は、実は平成12年の10月6日に大地震がありました。マグニチュード7.3です。横ずれ断層です。今回の熊本の地震も、マグニチュード7.3の横ずれ断層なんです。同じメカニズムの地震がありました。実は、あのあたりはユーラシアプレートというところに乗ってしまっていて、フィリピン海プレートとぶつかるんですね。それで内陸型の地震が起こる。同じようなメカニズムで地震が起こるわけです。そこに我々としては、鳥取県の地震の時に助けていただいたものですから、そのみなさんにぜひ恩返しをしたいということで、いろんな方々を

送り出したところでありました。西村町長という町長さんにもお会いをし、蒲島さんという知事さんにもお会いをし、鳥取県で何ができるかなということをお話をしました。そして、避難所のほうにもまいりました。出てきた話は、子どもたちの様子が変だ、ということです。

想像していただければと思うのですが、大きな地震がありました。また家の中に戻るとまたあの大きな地震がやってくるかもしれない。それが子どもたちの行動に影響しているようだ、ということがありました。ですから、心理カウンセラーを鳥取県から派遣をしたんです。全国で一番早いタイミングでした。今、だんだんとそういう人たちを集めようということをしているところでもあります。

みなさんの仕事は必ず、そういう意味でこれから役に立つと思います。

世の中にはいろんな方々がいらっしゃいます。「違いを乗り越えていこう」、これが愛知淑徳大学の目指すところだとうかがいました。障がいのある方も、大学の中に同じように学んでいらっしゃる。

この辺も、鳥取県が目指しているところです。これは、先般ありましたパラリンピックのための陸上の予選会の様子でございます（写真 省略）。

愛知淑徳大学さんは、ともに生きる社会を目指そうということをやっています。私たちも、障がいを知り、共に生きるという障害者に優しい町を作ろうということを進めております。

ちょうどお話し申し上げますが、そういうボランティアの活動、あいサポーター運動というのを始めているところでもあります。

さっき天野先生からもお話がございました。「日本一のスナバがある」、これが鳥取であります。みなさん、おそらく鳥取県をあんまり知らないと思いますので、若干だけPRをさせていただこうということでございますけれども。

スターバックスという喫茶店があるということですが、それが全国どこでもできてきているわけです。鳥取は、実はコメダができたのは早かったのですが、スターバックスさんは長くできなかったんです。そうしたら鳥根県にできたんですね。

テレビ朝日という、暇なテレビ局がございまして、そこが鳥取県の知事室のほうにインタビューの

申し込みをしてきました。私は、どんなインタビューでも受けるので、そういう意味で応じるわけですが、その質問がふるっていました。なんと書いてあったかという、「スターバックスが鳥根県にできたことで、日本で唯一、スターバックスのないところが、鳥取県だけになった。ついては、県知事の見解を問う」と（一同笑）。こんな、人をバカにした質問があるかなあと思いましたけれど。その質問だけのために、テレビクルーが5人ほどやってくる。片道3万円ぐらい、飛行機代がかかりますから。なんちゅう暇なテレビ局かと思ったんです。でも、こっちはインタビューをぜんぶ受けて、情報発信に役立てようと思っているものですから、こちらも反論をいろいろ考えたんですね。

インタビューが30分ほどありました。「鳥取は、たしかにスタバはないかもしれませんが、ドトールコーヒーは3軒もあるんです。鳥根県は1軒もないんです」と。これはカットされました（会場笑）。

それから、鳥取県にはスターバックスはないかもしれませんが、実はラバルという地元の有名なコーヒー店があって、これは東京でいうと代官山なんかできています。ツタヤさんが本屋さんの中にコーヒーショップを作った、と自慢していますけれども、それより前に鳥取では、今井書店の中にラバルができています。こんな先進的な所ですよ。それから、楽天ショップで一番売れているコーヒー屋さんは、鳥取の澤井珈琲というのがありまして、これは調べていただくと分かります。これはほんとうなんです、澤井珈琲です。こういうように、鳥取はコーヒーの聖地でありますから、スターバックスは恐ろしくて来られないんでしょうね、というふうに言ったんです。「ありがとうございます」と、感心していただきました。これもカットされました。

（一同笑）こういうのは全部、番組的には面白くないわけですね。

で、唯一強がり半分で言ったのが、「スタバはないけれど、日本一のスナバがありますよ」——鳥取大砂丘です。これだけ流れまして、わずか数秒だったのです。

これが、何か知らないのですけれど、ワアーツと、番組が終わったあと、ニュースのあとに拡散し

たらしいんですね。『スーパーJチャンネル』。実は、この番組は鳥取県民は見てないんです。テレビ朝日系列は、鳥取では放送されないんです。したがって、訳の分からないところ、どンドンドンドン広がっていったんですね。この際、これに乗っかろうと。

さっき、なんでこんなアラブの衣装を着ているのかな、という話がありましたけれど、この際、我々も宣伝しようということになりまして、いろいろと考えた中で、少しアラビア風に砂漠のイメージでやってみよう、ということでありました。

前の日に内覧会がありまして、スターバックスの新しくできるお店、関根さんというCEO、たいへん真面目な方でいい人です。ほんとうに仲良くして、人間関係は問題ないのですが。その方から招待状がきまして、内覧会に来てくれ、と来たものですから、こういう姿をして行きました。案の定、ワイドショーがワアーツと、カメラが20台ぐらい来ているわけですよ。とんでもないことになったなと思ったのでありますが、こっちも宣伝せにゃ、ということでもあります。

それで、店に入った時に、さっきお話がありましたけれど、「キャラメルマキアートはありますか。名物らしいですね」と申し上げたら、関根CEOが、「ちょっとちょっと、キャラメルマキアートを持って来て、すぐに」と。それで、キャラメルマキアートを飲ませていただきました。ちょっと甘くてオシャレな飲み物でありました。それをチューツとすすりますと、マイクを持ったメディアの方々が、みんな嬉しなって、「どうです、知事、初めて飲んだキャラメルマキアートのご感想は」「いやあ、スターバックスさん、サスナバ」と。それから、「キャラメルマキアートもいいですけど、鳥取は砂丘にはラクダがいるので、キャラメルマキアートはどうですか」と言ったら、「さあ、それはどうですかね」と言うんですね。それで、「スナペプチーノを作ってホチイの」と言ったんです。（一同笑）。そうしたら関根CEOは、「いやあ、それは知事、さすがに無理です」と言うんです。

これは全部、それぞれにメディアで流れまして、大宣伝になっちゃったんですね。鳥取の砂丘の宣伝になったわけですが。私どもがかけた値段、この衣

装とか看板——この看板には、「砂丘からサンキュー」と書いてあるんですね。(会場笑) この看板などで30万円の広告費でした。広告効果が、広告会社がはじきましたら、34億円でございまして、1万倍の効果があるということでございます。

このようなことをやっていて、私も驚いたのは、「すなば珈琲」というのができちゃったんですね。これは私はぜんぜんタッチしてなくて知らなかったんですが、新聞を読んでいたら、「すなば珈琲ができます」と書いてある。いったい何なのかなあと、びっくりしました。そしてなんでも、他人事でもないし、行ってみようかと思って、できる日に行っただけです。行ってみますと、これは鳥取ではよく知られたチェーン店でありました。本業は村上水産という、ハタハタとかイカとか焼いたり、酒を出したりしているところですが、コーヒーも上手にたてられるので、すなば珈琲というのを作っちゃったんですね。それで、みんなで氣勢をあげました。「このすなば珈琲、シアトルに行こう」とやったわけです。宣伝になったのですけれども、今ではそのすなば珈琲さんは大行列です。連休なんかも行列ができて、今はすなば珈琲は鳥取市内だけで5店舗あります。スタバはまだ1店舗しかありませんから中小企業でありまして、こっちのほうが多いんですね。

こんなことをやっていたら、今度は「あなば珈琲」というのが、これからまた出てくると思うのですが。こんなようにして、いつの間にか、コーヒーの聖地として知られるようになってきました。

また、さっきも話がございましたが、砂CUTE(サキュート)な鳥取を作ろうと。大国主命で八神姫と結ばれる、白兔の物語ですが、あれも恋人同士が結ばれる物語なんです。そんな恋の聖地であります。最初は、山の中にこういうピンク色の駅を作ったんです。これは、ネットで賛否両論分かれたんですね。ただ、我々は経験的に分かってきたのですけれども、賛否両論出るぐらいのほうが、宣伝のお金をかけずにワアッと伝わるのが分かっています。それで良かったのですが。これがパワースポットになっています。

また、ピンクのカレーを作っちゃいました。なんで、カレーがピンク色かというんですね。これは、ボルシチというスープがありますね、ロシア料理の。

あれに入れるのは、ビーズという、ようするにカブです。あれを上手にやってもらったので、企業秘密もいろいろあるんですが、ピンク色になる。自然のピンクなんです。

さらに、ピンクの醤油を作りました。ピンクのマヨネーズも。今度は、ピンクのワサビも作ってしまった。

こういうようなことで、今、鳥取をピンクに染めようということで、「ピンク鳥取フォトコンテスト」というのをやります。これは、誰でも応募できまして、鳥取県に来なくても、地元で撮ってもらってもけっこうなんです。「鳥取ラブ」と「鳥取ピンク」をテーマに賞金付き10万円の、そういうコンテストを、今やっているんですね。こんなようなことで、地域をもっと元気にしよう、というようなことを始めているところであります。

実は鳥取県は、こちらともいろいろルーツがございます。

もともと鳥取藩というのは池田家でありまして、池田家は、これは信長の家臣だったのです。尾張の人ですね。その池田の恒興のお母さんは養徳院というのですが、これが信長の乳母でございます。ですから、昔のことですので、信長とは兄弟のようにして育ったんですね。実は、この恒興は最終的には討ち死にをするんですが、ご案内の小牧・長久手の戦いで、長久手で敗れるということでもあります。ですから秀吉についた家康と戦ったんですね。実はこの愛知県とは深いつながりが、歴史的にはある所がございます。

今でも池田の殿様がいますよ。池田のお殿様は、ご当主は今女性なんです。第16代・池田百合子様でいらっしゃいまして、東京に住んでおられます。この間、池田百合様が、いろいろと歴史について少しお話をされたんですね。その時におっしゃったんですけれども——ああいうお殿様たちの子孫、華族ですね、明治時代の華族。そういうグループの集まりがあるんだそうでありまして、そこに行ったら、いろんな話が出て驚くことがありますね。ある時、このご当主のずっと直系といいますか、御代のお殿様の子孫ですけれども、その方がその会に行かれましたら、森さんという方がいらっしゃるんですね。その森さんという女性が「長久手では大

変だったですね」とおっしゃったそうです。なんの
ことかよく分からなかったそうではありますが、この
「長久手では大変だったですね」とおっしゃっていた
森さんというのは——あの森蘭丸っていますでしょ
う。信長と一緒に本能寺で亡くなりました。あの森
蘭丸の兄弟で森長可という人がいたんです。やっぱ
りこちらの大名なんですけれども。その森長可も、
この小牧・長久手の戦いの時に、やはりやられちゃ
っているわけですね。そんな話が現代に飛び出すと
いう、そんなようなことをごさいます。

ですから、ここ長久手は、我々にとっては怨恨とい
いますか因縁の地でごさいます、複雑な思いで、今
日はやってきているわけでごさいます。

それから、ドラゴンズの選手もけっこう今、鳥取
に来ているんですよ。山本選手とか。辞めちゃいま
したけれど。ここに書いてありますが、岩瀬、山井、
山本選手も書いてありますが。これですね。トレー
ニングをする時に、鳥取にあるトレーナー、小山
さんという人ですが、けっこういろんな人をトレ
ーニングしてまして、イチローだとか、ああい
う選手もそうなんですけれども、Qちゃんなんか
もそうですね。そういうトップアスリートを育てた
こともありまして、けっこうドラゴンズの人も来
られています。

鳥取の場所が、よう分からんという人がいます。
愛知のこっち側のほうなんです。鳥取県はどこだ
と言われて、時々分からない人がいるものだから、
鳥取県は実はTシャツを作りました「鳥取県は島
根の右側です」と書いてあります（会場笑）。そう
したら、島根県も、実は同じようにお土産のT
シャツを作りました。「島根は鳥取の左側です」
って書いてあります（会場笑）。結局、どこな
のかよく分からないことになるわけですが（会場
笑）。

こんなようなことで、鳥取になります。今、だ
いたい新幹線と特急を乗り継いで3時間ぐらいで
実はけるし、高速道路もつながってきてまして、3
時間半で鳥取市、あるいはこちらの西のほうの境
港方面にも4時間半ぐらいで行けるぐらい、だ
いぶ近くなってきているところでもあります。

また鳥取の海は宮古島といっしょで、日本で一
番透明度がある綺麗な海岸というふうに、環境省
から言われています。今はいろんなアクティビティが

ありまして、ユネスコの世界ジオパークにも認
定をされています。

最近ではさかなクンが、すっかりここに入れ込
んでくられて、「ギョギョ」って言っています。「鳥
取の海は、すごい綺麗でギョ（魚）がいます」と
いまして、来られるわけですね。私どものジオ
パークの博物館があるのですけれども、その「ギ
ョギョバ イザー」、アドバイザーになってもら
っています。

また三徳山という所、これは日本で最古の神
社様式の建築がある所で、不思議な建物があり
まして。また大山という1729mの山があり
ます。こういうものが日本遺産として認定を
される所でもあります。

この三朝温泉は身体にたいへんよろしゅう
ございまして、この温泉の周りでは、がんの
発病率が2分の1というデータもございま
す。

これからちょうど皆さん、参議院選挙とい
うのも迫っていますが、社会に参画をしてとい
うことになるのかもしれませんが。愛知県は鳥
取県と若干違って、大きな所です。しかし、
私どものところは人口57万人ですから、小
さな所です。だからこそ住民のみなさまが
参加できるような、そういうコミュニティー
ができるのではないかなと。そんな思いで、
よそにはないことをいろいろ始めていま
す。たとえば住民投票制度を作ったりして
いますね。情報公開では全国でナンバーワ
ンの情報公開をさせていただきました。また、
県民のみなさんの参画できる、いろんな
チャンネルを作っています。たとえば市議
会などにも参加していただいたり、意見
を提案していただき、それを実行する、
そんな仕組みを作ったりもしました。

これから18歳まで選挙権が下がってくる
わけがあります。そういう意味で、私たち
はそれぞれに社会を支えていかなければ
ならない大切な役割があるわけありま
す。「Government of the people, by
the people, for the people, shall not
perish from the earth」というふう
に言ったのが、アブラハム・リンカーン
であります。このリンカーンの演説、
「人民の人民による人民のための政府」
これは実は、墓場でなされているん
です。南北戦争がありました。熾烈な
戦いがあります。北軍の大將だった
大統領にあたるのが、リンカーン
だった。それで、南軍からだ
いぶ劣勢になったのですね。この
ままでは民主

主義がなくなってしまうかもしれない。ゲティスパークという墓地、南北戦争で命を失った者たちの御霊の前で、こういう「人民の人民による人民のための政府を、地球上からなくしてはならない」というふうに言ったのが、この有名な演説なわけであります。ですから、そういう大切な役割、私たち一人ひとりが担っているんですね。

それを、小さなコミュニティであれば、存分に行使してもらおう。それが鳥取のデモクラシーであります。情報公開度はナンバーワン。それから学生さんの議会をやったり、いろんな所に出かけてまいりまして、トークをさせていただいたりしています。

これはアドボカシープランニングという、最新の民主的な自治手法でございますけれども、住民のみなさまに案を出していただき、それを法的に支え、計画を作り、それを事業として実施をしていく。この一連のプロセスを行政と、それから住民のみなさまの団体との、その接続のうえでやっていこうとこのころであります。

また議会も、全国で最も開かれた議会になっています。たとえばケーブルテレビが、全部放送するんです、生放送で。私も一般質問や代表質問があるんですけれども、そういう時は、これで放送されているんですね。ですから、生放送ですから驚くことが起こります。議会で答弁をして、この議席のほうに私がおりましたら、後ろのほうから小さなメモ用紙が回ってきました。職員が持ってきてまして、何かなと思ったら「知事さんに、テレビを見ている人からのメッセージです。『髪型が乱れています』」(会場笑)——ここまで見とるんかい、と。それぐらい身近な行政というのですが、私たち57万の県政だからできるのかなというふうに思っています。

また議会とは背是非でやっていますので、時に否決だとか修正というのでもOKなんですね。こんなようなことで、ほんとうの意味のデモクラシーというのを、もっと日本はやらなきゃいけないんじゃないか、というように思います。

さっきちょっと、出張旅費のお話が天野先生のほうからございました。これはどういうことかと、舛添さんが今、今日も記者会見をやっているわけです。やはり、説明責任を、私たちは果たさないといけないんですね。それで住民のみなさまの信頼がな

いと、いい仕事ができないわけでありますから、その信頼関係を作ることが、まず第一なんです。そんな意味で、お金の使い方ということがあるんだと思います。

海外の出張旅費が問題になりまして、舛添さんがファーストクラスで行ったとかいうわけです。実は私も、規定ではファーストクラスで行けるんですけども、そのクラスでは行かずに、ワンランク下で行っています。実は、全国そういう知事が多いのですが。最近、産経新聞がアンケート調査をとりまして、その実態を全都道府県、調べたんですね。こちらの大村さんはファーストクラスに乗っていたわけでありまして、まあ大都会と中小企業は違いますので。私も、そこそこでやっているわけですが。適当に英語でカウンターへ行きさえすればいいわけですし、それからホテルでもフロントで手続きさえできれば、誰でもできるわけです。私は、セクレタリー、秘書は連れて歩かないのですね。そのようなことで、「1人で旅をして節約をしています。1人で出張をしています」ということを出させていただきましたら、産経新聞で、それが見出しになっちゃったんですね。産経新聞にどう出たかという、「鳥取・平井知事1人旅」ですね(会場笑)。若干ニュアンスが違うような気がするんですが。(会場笑)見出しがそういうふうに出たら、それがワーツと出まして、今日なんか発売される『女性セブン』だとか、みんな追っかけてくださっているわけでありまして。

「日本一の鳥取砂丘を守り育てる条例」というのを作ったりしました。これは覚えているかもしれませんが、愛知県の、実は学生さんだったんですけども、鳥取砂丘にこられて「HUCK」と大きく書いて帰られて、全国で問題になっていたんですね。その時に、私のほうで「条例で罰則をつけて禁止する」ということを申し上げましたら、これがけっこう社会問題になりました。議会に出しまして、そうしたら議会で賛否両論分かれて。その時は、YAHOOに助けられました。YAHOOが「みんなのアンケート」というのを持っているんですね。それで政治・社会問題のアンケート調査を出された時に、「鳥取県の砂丘に落書きをしたら罰則がかかるのどうか」と。それは、賛成する人が75%ぐらいいたん

ですね。そうしたら議会の雰囲気が変わりました、「じゃあ、やろう」ということですね、若干修正されたんですけど、通りました。我々の原案は「美しい鳥取砂丘を守ります」と条例に書いてあったのが、議会の一致で「日本一の……」に変わったのですね。名前が変わったのと、あと罰金が50万から30万に引かれたのが変わったんですけども。そんなようなことで通りました。

こういうことを、コミュニティで話し合っただけでルールを作って。考えてみますと、こういう条例を作るのは厳しいことでもありますけれども、しかし砂丘というのは1つの王国のようなものだ。そこに入る時は、そのルールを守りましょう、ということにしよう。それで、やるのがむしろ環境にいいという、環境が美しいというイメージがわいて、観光客のみなさんにもプラスの効果があるわけでありまして。

また、やはり議会でも議論しました。これは、国はぜったいにやらないと言っていたんですけども。「危険ドラッグは違法だ」と書こう、と。これは厚生労働大臣は憲法違反であってできない、と公言したんです。私が大学で学んでいた感覚からすると、たとえば覚せい剤が取り締まれるんだったら、危険ドラッグだって同じように取り締まれるだろう。鳥取県は、成分を特定せず身体に害悪をもたらすものはダメだと書けば、罪刑法定主義に触れず、棄権薬物の製造から所持までを禁止する条例を作りました。人口が一番小さな鳥取県が条例を出して、それが通ります、そのあとどうなったかということ、国が法律改正をしたんです。全国でそういうような制度改正になったんです。

鳥取県がこれをやりましたら、インターネットで販売している危険ドラッグのサイトに、こう書かれました。「鳥取県への販売はNG」と。

やはり信念をもって、地域で考えていこう。みんな話合っただけで、そして議論をして、答えを出して実行していく。それが私たちには大切なんだということでもあります。

鳥取県、地図をひっくり返してみますと、実はアジアに近いんですね。愛知県よりも、よっぽど近いです。ですから、これを生かした地域づくりができないかな、ということを考えてみました。外国人旅行者がだんだんと増えて、大型船の寄港ラッシュ

にもなりました。去年は、クァンタム・オブ・ザ・シーズという4700人のお客さまを乗せた船が来たんですね。中国の方が、いっぱいやって来ました。事前に聞いていたのは、4000人乗りの船だと聞いていたんですね。4000人乗りの乗客定員。降りてみたら4700人いたんですけど。まあ、いろいろあるのかな、と思いましたけれども（笑）。この方々が買物に来たわけです。鳥取の日吉津村という村に行きましたら、3000人なんです、人口が。そこに4000人以上のお客さんが来たというので、だいぶ話題になったのを覚えておられると思います。

また自然を生かした活動もしています。その中には、海でカヤックを漕いで、それから自転車で大山の山に登りかけて、頂上まで歩いて上がるツーリズムサミットという大会もあるんですね。これには去年、きのうちょっと沖縄の事件で陳謝されていたけれど、アメリカのケネディ大使も来られました。ケネディ大使はおみえになって、たいへんに疲れたと思うのですが、申し訳ない、皆生・大山上の頂上までしっかり上がられまして、すごいアスリートですね。驚きました。火をふいて下りてこられたんですけども、下りてこられて、地元のメディアのみなさんから質問を受けていました。「どうですか、来年もまた来てくれますか」というふうに聞いたんですね。そうしたらケネディ大使はおっしゃっていました。「もちろん、来年も来ます」というふうにおっしゃっていました。すごいなあと思ったんですが、よく考えたら外交官ですから、これはまちががなく外交辞令でございました（笑）。たぶん来ないだろうな、というふうには思っているんですが。

鳥取県、実は『名探偵コナン』の作者、青山剛昌先生がいます。『ゲゲゲの鬼太郎』の聖地、水木先生の故郷。さらに最近は、『Free!』という水泳のアニメ、京都アニメが出ていますけれども、これの舞台が、実は鳥取県。まさに『ひなビタ』というゲーム。これには倉野川市というのがゲームに出てくるのです。いろんなマンガやアニメを売り出すということをして、多くの方々が訪れるようになってきました。水木しげるロードは、年間200万人ぐらい、お客さまが今でも来るんですね。

この際、空港も変えてしまおうということで、米

子鬼太郎空港という名前に変えました。そうしたら水木先生が、当時まだご存命でいらっしゃいまして、おみえになりまして、おっしゃいました。妖怪の世界を私たちに教えてくれた大漫画家でいらっしゃるんですが、それで感想を聞かれましたら、みんなの前でおっしゃったのは、「鳥取県も面白いことを考えますねえ。米子鬼太郎空港といいますけれど、ほんとうは妖怪なんてこの世にいないんですから」とおっしゃいました（会場笑）。あなたが言わないでください（会場笑）、というふうに思いました。そうしたら今度は、その空港の名前ができたなら、青山先生と一昨年のお正月にお会いしましたら、「鬼太郎だけズルい。コナンはどうしてくれる」と。「じゃあ、もう1つはコナン空港にしましょうか。」と言いましたら、「ぜひ、それをやって。俺がなんとかするから」と、コナン空港ができちゃったんです。今、けっこう女性を中心として、空港だけに来るお客さまが来ていましたね。すごいなと思います。

これは、世界的にもコナンは有名でしてね。鳥取県はコナン空港を作ったけれど大丈夫か。こんな空港を造ったら、毎週殺人事件が起きる。（会場笑）——大丈夫です。毎週解決されます。

そんなようなことをごさいますて、いろいろとこうしたことをやっているんですが。

『名探偵コナン』、今年は、アニメ20周年の年でありまして、コナンの里というのを、今から作ろうということをしております。また、水木しげるロードはリニューアルします。

鳥取の美味しいものは、いろいろございまして、後ほどまた申し上げますが、いろんな特産品なんかも出ています。中京圏でも、プロッコリーとかスイカとか、ありますね。そういうのも鳥取ではけっこうできます。

スイカなんかも、美味しい甘いスイカで、特にこれが有名になったのは、ドバイに売りに行ったんですね。ドバイに売りに行ったら、このスイカ1玉3万円で売れました。すごいですね。これを日本経済新聞が「3万円で鳥取のスイカが売れるんだ」と書きました。そうしたらスイカの値段がちょっと上がりまして、けっこう長野のスイカと、今は1位を争うぐらい高いスイカになっていますね。内緒の話を言いますと、ドバイで売れたスイカは7個でした。

でも、新聞には「ドバイで売れた」と出まして、それで鳥取としてはいい宣伝になるなということなんです。

さっきお話がありました「新甘泉」というブランドを作ったんですね。この新甘泉(しんかんせん)、いつまでたっても新幹線が鳥取県にできないものですから、梨で作ったんです。新しい、甘い、と書きましてね。この間、こうしたイベントをさせていただいたんですけれども、転がすと速いです。300キロで走りますから。

そんなような「新甘泉」、あるいは「鳥取茸王」、これもとっても美味しいものでありまして。石川県は、これを「のとてまり」といって出していますね。

こんなような、いろんな特産品を出しているわけです。

人口がどんどん減る。これが地方の課題なんですね。それで鳥取県は人口密度のことを考えるんです。先取りした移住対策なんかを始めました。そして、いま流行りの地方創生。といえば、自然、人の絆、それから鳥取のゆったりとした時、これを武器にして売り込んでいこう。移住者を増やそう。若い方々にも楽しんで住んでもらおうことにしよう、ということに取り組んでおります。これは、全国8位まで急上昇しました。それから移住者の確保。去年は1943人、移住されています。これはナンバーワンかナンバーツーぐらい、47都道府県で。と思いますね。去年はうちは1246人で、これが岡山につぐ第2位なんです。これは人数ですから。率じゃありません。その前の年は962名で全国1位です。なんでかという、かなり一生懸命移住対策をやっています、移住を希望する方に、いろんな「こういうことをしたら移住しやすくなる」ということを研究して作ってきてもらったんですね。そんなわけで、国の見込みよりも6000人ほど、去年の10月の人口調査では、人口減が緩和されていました。

鳥取県の移住対策、年を進めてきておりまして、暮らしやすさ、住みやすさランキングでは1位に、さっきの倉吉市が入ったり、また『田舎暮らしの本』、宝島社が出している雑誌では、岩美町という所が、町村では初めて全国1位。こんなように人気が出てきています。鳥取はやはり住居費だとかが安かったり、そういうことで、東京と比べてみますと

確かに給料はちがうかもしれませんが、いろんな費用を引いてみますと、一生涯での平均貯金額が、これはどっちも1200万ぐらいなんです。それだったら、ぜいたくに自然やゆとりを楽しみながら、子どもたちをのびのび育てながら、そういう暮らしもあるんじゃないのかな、という選択が増えてきている。

また、全県あげて、企業さんにも協力していただいて、こういうメンバーズカードというのを作ったんです。もし、この中で鳥取に就職してみよすとか、移住をいずれ考えようという方、これをとられますと、県内の企業で割引が受けられるんですね。たとえば宿代が安くなるとか、飛行機代は半額とかですね。それから引っ越し代が安くなったり、自動車教習所が安くなったり。そうやって、企業さんも応援しよう、そういうようなことを、この5月から始めているところであります。

また、未来人材育成基金というのを作りまして、鳥取に就職をされる方については、半分ないし4分の1、奨学金の返済分を鳥取県のほうで負担しますよ、という制度です。これは、全国で初めてです。うちがやりましたら、今度は徳島県が同じようなことを始めようということになりました。

また子育て。これが特徴のあるところでありまして、たとえば少人数学級を全学年でやりました。また保育料、第3子以降は全部無料。全部ですよ。それから、低所得者でも第2子以降、保育料無償化。これはいずれも、全国トップであります。さらに、中山間地は保育料完全無料化ということをしてしましたら、こうやって引っ越してくる人がどんどん出てきた。

特に注目されているのは、森の幼稚園というのですが、園舎がない幼稚園・保育園です。ずっと森の中で育てるんですね。異年齢の交流って、大事なんです。たぶん、これからみなさんは発達心理学などを勉強されると思いますが、前頭葉を育てていくのは、異年齢のコミュニケーション、これが最大の栄養なんです。これが支持されて、国内はおろか外国からも引っ越してこられる方がいらっしゃるぐらい、森の幼稚園が注目をされております。

これが、さっき申しました中山間地の保育料無償化。げんにこういうように転入世帯が増えてきてい

ます。やっぱり皆さんもこれから生まれると思いますが、子どもを育てるといのは、けっこう経済的な大変さも、あります。その時は、鳥取でこういう施策をやっているなということも思い出していただければと思います。

また、こうした所に入ろうとして、有名なパン屋さんだとか、いろんなアーティストだとかそうした方々が、目指してくださるようになりました。

また男女平等、これは東北大学が調査したのですが、鳥取県は全国1位になりました。女性の働く度合いだとかが高いですね。それを加速させようと、いま運動をしております、県庁の職員の数も増やしております。また、起業するベンチャーを起こす女性たちを応援する施策も始めております。

毎年、経済界の方や、あるいは自衛隊だとか、そうした方と一緒に「イクボス宣言」をして、育児環境を職場で整えようとしています。

また最近、化粧品会社の関連の会社が作られたんですけれども、女性のストレスを調べたら、鳥取県が最も女性のストレスが少ないという結果が出ました。だいたい内容を分析して分かったのですが、たとえばママ友のストレス、こういうものがないんですね。そんなようなことなど、いろいろと特徴があるのかもしれない。そういうことを、いろいろとこれからも進めて、女性も住みやすい、働きやすいところを目指していきます。

障がい者権利条約が2008年に発効されました。このあと、直後に鳥取県では、先ほど申しました「あいサポート運動」という運動を始めました。「障がいを知り、共に生きる」これをモットーにしよう。障がいというのは、これはディスアビリティと言いますけれども、できないことがある、だけの、同じ人間なんです。それ以外は全人格的にいっしょなわけなんです。ですから、そういう仲間のことと知って、ともに生きていくエチケットを学ぼうということなんです。

こういうことを始めましたら、このたび障害者差別解消法というのが4月から施行されました。合理的配慮といわれるようなことを企業なんかも考えていくことになります。そのはしりを鳥取県がやったということですね。

障がいについて理解をする。そして配慮すべきこ

とを考える。たとえば車椅子の人がいたとします。車椅子の人が階段の前にいました。どうするか。2人以上で車椅子を持ち上げる。そのとおりなんです。ただ、その先なんです。2人以上で持ち上げるのはいいんですけども、その時にこちらの階段の上でやったら、階段の下のほうに向くように車椅子を持ち上げると、これはおっかないです。落っこたされるかもしれないと思うし、ジェットコースターに乗っているような気分になります。ですから、階段の上のほうを見るような形で上のほうを見るような形で、車椅子を持って上がる。これはいわば、人間同士付き合うエチケットなんです。そういう知恵を学んだうえで、あいサポーターのバッチをつけて、障がい者と共に生きていく、このような決意をもってやっていこうということです。

たとえば聴覚言語障害は分かりにくいですが、いろんなコミュニケーション手段がある。必ずしも手話だけじゃないですね。筆談ということもあつたりします。また心の病とか、それぞれの特性に応じたことで考えていかなければなりません。

この鳥取県、この小さな鳥取県で始めた運動が中国各県や奈良・長野・埼玉、今度は和歌山、韓国、こうしたところにも人がいきはじめまして、小さな鳥取県が決意して行動したことが、全国を動かし始めているということになってきていますね。

それから、ボランティアの養成です。このへんが鳥取らしさ、ということかなと思います。災害時のとき、お年寄りが孤独にならないように、そうしたいわば災害弱者、生活弱者のことを見守っていく。

また鳥取県、人が中山間地で減ってきてしまった。ですから、こういういわゆる移動販売者、あるいは新聞配達のみなさんにも、お年寄りを見守ってもらう。こんなことを全国で初めてやったのですけれど。こうした共生ホームといわれる障がい者や高齢者、子どもたち、みんな一緒に入るような、そういう施設も作った。人口が小さい所なりの支えあいがあると思います。

特に今、注目いただいていますのが、手話言語条例というのを平成25年の10月8日に作りました。全国で初めてこういうものを作ったんですね。「鳥取県で、はじめにやってくれ。それを全国に広げてくれ」という声がありました。私たちは立ち上がった

たわけでありました。それで、手話を学ぶこういうハンドブックを作り、全学校で今、学びを始めています。自主的な手話学習も推進しています。また、こういうタブレット端末を利用した手話通訳なども始めています。電話のリレーも、進むようにいたしております。

これが手話通訳サービスの状況ですね。

さらに音声、音しか分からない人がいらっしゃる。音声で、マイクで喋ると文字になる。音声文字変換システムも導入をさせていただいたりしています。こうやってサポートしようということなわけですね。また、これは音とろうの両方ある人もいらっしゃいます。

あるいは音声機能障害の方、その特性に応じたコミュニケーション支援というのを考えていかなければいけないというわけです。これは言っているだけではダメなので、実際にやる人がいなければならない。そういうことを鳥取県から始めています。

盲ろう者支援センターというのも作りました。実は、目が見えない、耳が聞こえない、そういう方々というのは、どちらかというとき引きこもってしまうわけですね。社会の中で、途切れてしまう。存在として切れてしまいがちなんです。私たちは去年1年間かけて、どんな盲ろう者がいらっしゃるかというのを調査をしています。今年、盲ろう者の支援センターができました。これができたのは、東京都についてうちが2番目なんです。一番お金がなくて人口が少ない所が、2番目に始めさせていただいたわけでありました。

また障がい者の就業支援、これも大事な課題でありまして、私が就任したのは、ここなんですけれども、以後、全国平均をどんどん上回って、今、差をつけ始めています。給料を上げてきていますね。そのために、こういういろんな製品を作って販売することを応援しています。健常者だから、ふつうの人だからいい製品ができるということではないんですね。これは障がい者が作った、梨のまわりをコンポートした、そういうお菓子なんですけれども、農林水産大臣賞をとったんですね。しかし、これは健常者と同じ賞なんです。障がい者だからとった賞ではないんです。美味しいからとった。こういうことは、絶対にできる。これができるようになれば、

障がい者でも、同じように給料をそれなりにもらって生活できるようになるだろう。こんなようなことを私たちは始めています。

先導的にさせていただいたのは、たとえば農業との連帯とか。あるいは漁業との関わりですね。農業者は、今は人手不足。障がい者の方がこれにあずかることによりまして、障がい者は給料を得られるし、農業者は人手を得られる。そういうマッチングを始めたんですね。

これが漁業なんかの寒冷で、ワカメなんかも有名百貨店で売ったりしています。見た目ぜんぜんわからないです。美味しいといわれ、高い値段がついています。そういうことができるんですね。

また芸術や文化、そういうアートの世界ということもある。これは、チャーホフの『3人姉妹』をやっているんですけども。これを演出したのは、中島先生という方でいらっしゃいます。鳥の劇場というのを、いま移住して鳥取県でやっています。この方は文部科学省の芸術選奨・新人賞をとった、バリバリの注目の演出家なんです。本物の人が本物の演出をして、そうしたことをやってくださる。

これをご覧いただきました秋篠宮家の紀子さま、佳子さまが来られたのですが、障がい者の方が感極まってしまって、ワーッと泣き始めたんです。舞台袖にご挨拶に行かれた紀子さま、佳子さまの前で、全くのハプニングです。紀子さまが素晴らしいなあと思いましたが、お一人おひとりの障がい者の方、泣きじゃくっているところに行かれて、一人ひとりハグしてあげました。佳子さまも一人ひとり手をとって、「良かったですよ」と言って下さいました。こういう体験を、ぜひ障がい者の方にもしていただきたい。そういうように思います。

日本財団も私どものチャレンジに協力していただいています。こういういろんな事業に協力していただいています。たとえば、障がい者用のタクシーを200台配備ということは、鳥取県のタクシーの3分の1ぐらいです。それぐらい鳥取は、ほかの町と違った町になる。そういうことを今、日本財団にも応援してもらっています。

これが、オリンピック・パラリンピックを目指すわけですが、いよいよこれからリオのオリンピックが8月に入り始まるわけでありまして。9月にはパラ

リンピックがあります。この時、文化の祭典でもあるわけですね。私たちは、障がい者の芸術・文化の祭典もやりたいと思ひまして、13の都県が集まりまして、それでスタートしようとしています。いずれ、大村知事も参加していただけたと思っています。こういうようなことを、いま始めたところでありまして、障がい者アートフェスタ2016、その第1回の皮切りを鳥取県で10月30日に行うことにさせていただいたところでもあります。

また、冒頭ご覧いただきましたように、このたびはパラ陸上、パラリンピックの予選会の陸上選手権大会を鳥取県の「コカ・コーラウエストスポーツパーク」という所でやったんですね。山本選手が世界新記録を出したり、高桑選手がアジア新記録を出したりしました。みなさん、口々に言っていたいて、たいへん我々も嬉しかったのは、「鳥取の人たちがほんとうに優しく出迎えてくれた」と。今まで、ある大都市でこの大会を毎年やっていたんですが、お客さん、来ないんです。私たち鳥取でやった時は、お客さんが5000人来ました。その人たちがみんな、音の出るセンスなんかを叩いて応援をしたんですね。それが選手を後押しして、世界新記録やアジア新記録、こういうのが生まれてきたわけでありまして。

そういう中、全国手話パフォーマンス甲子園というのを、私たちは始めました。愛知県からも参加校がありました。手話のメッカとして目指してもらおう。さっきお話がありました佳子さまですね、この手話パフォーマンス甲子園に来ていただきました。2年目は紀子さまがおみえでなかったものですから、佳子さまのほうの手話でご挨拶をされたわけがあります。

これが、その時の様子でございます(写真 省略)。開会式の時の様子でございます。全国の高校生が優勝を目指して手話でパフォーマンスを、ダンスであるとか、それから劇であるとか。これが優勝した、奈良のろう学校の演技であります。一切言葉を喋らずに、手話だけですべてを表現していました。言葉が聞こえなくても、伝わる心があるわけでありまして。

この舞台が終わられて、実は私はこの1月、歌会始という行事に皇居に呼ばれました。その時に、終わったあとに配られた、ご皇室のみなさまが詠まれた句の一覧が配られました。白い和紙に書いてあり

ましたのが、佳子さまの御歌でございました。それが、「若人が力を合わせ創りだす 舞台の上から思ひ伝わる」——。

みなさんも、この学び舎で学び、そしてそれぞれの人生の舞台に立たれると思います。みなさまが作り出す、その舞台から世界中の人に思いが伝わるんだ、というふうに思います。今、あちこちで検問があるのと、サミットが控えていますけれども、今この地域に世界中から注目が集まっています。いよいよ伊勢志摩サミット。その時を迎えようとしています。その時、みなさまはここ愛知淑徳大学で学んでいらっしゃるわけなんです。世界中の方と触れ合うチャンスであるかもしれませぬし、みなさまの地域が世界中で報道される。そういう貴重な季節がやってきているわけでありませぬ。みなさまもぜひ、多くのことを経験していただき、そしてこれから旅立っていくんだらうというふうに思います。

あの世に旅立たれた水島先生が、こういうふうにおっしゃっておられます。「しないではいられないことをし続けなさい」——先生は決してお金持ちではなかつたかもしれませぬ。

しかし素晴らしい家族がいて、多くの方々に愛されました。自分はマンガが好きだから、それをやり続けたんだ、というふうにおっしゃっておられました。

みなさまも、そんな自分の生き方を探していただければなと、というふうに思います。先ほど、いろいろと教えていただいて、ちょっとペラペラめくってましたら、愛知淑徳大学がこのたびエンブレムというのですか、イメージのマークを作られる。「AS」と書いておられる。とんがったほうがたくましきであり、Sのほうが優しさという。そこにユニバーシティのUをつけ、そのASUをつなげると、「アス」になるんですね。さっき気が付きました。

みなさまも素晴らしいキャンパスで、これから学ばれますことを心からお祈り申し上げまして、私からのメッセージにかえさせていただきます。どうもありがとうございました（拍手）。

【司会】平井知事、どうもありがとうございました。

少し時間がありますので、質問を受けたいと思います。では質問を受けたいと思います。じゃあ、挙

手を。

はい。

【堀田】堀田と申します。本日は貴重なお話をありがとうございました。

私は2年前に倉吉市に2週間滞在させていただいて、とても住みやすいというか、過ごしやすい所だなと思ひました。

平井知事さんも、すごく人柄のいい感覚を覚えたんですけれども、県民の意見を集めることだったり、移住者を増やすことだったり、人とのつながりを、すごく大事にされているかと思うんですけれども、出会っていく方々と関わる上で大事にしていることなどがあれば教えてください。

【平井】ただいまは、堀田さんのほうからご質問がありましたけれども、大事にしているというのは、やはり人間関係のことでありませぬから、自分のことと思ひを通じなければいけないですね。これは、けっこう技術がある程度あるのかもしれませぬけれども、技術というテクニックでいえば、まず「つかみ」ということです。だいたい話の最初に、少し人を笑かすような話を入れたりとかね。そういうテクニックはあるけれども、もっと大事なことが実はあると、私は思ひました。

さっき申しましたように、最初に就職をして兵庫県で、今までぜんぜん経験のしたことのない職場というところ、違う土地に行きました。そこで一生懸命、自分なりに机に向かって仕事をしていたんですね。パソコンを使ったり、なんだかんだやって。いろんな方々とお話し合いをしたりして。しかし、どうもそれだけではなかなか友だちというのは、増えそうではなないんですね。その時に上司の人に言われました。「平井ちゃんは頭がいいかもしれな。見ていると分かる。でも平井ちゃん、もし道路の上でカミソリを振り回す人がいたら、平井ちゃん寄っていくか」と言ったんですね。「寄っていきませぬ、恐ろしくて」「そうだらう。人間て、そういうもんだ。だから、小賢しい理屈ばかり言ってるだけで、自分はすごいぞ、と見せようとしているだけでは、ぜったいになかなか人間関係って結べないものだよ」ということを教えてくれたんですね。それで、むしろ本音をさらけ出すぐらい、自分の弱みを、時に見せるぐらいがちょうどいいんだ、というふうに教えら

れたわけでありまして。たとえば失恋してしまった話だとか、失敗した時の話だとか、いろいろと自分なりに持っていることを、時々ポロポロッと混ぜる。そうすると、意外に相手も「ああ」というふうに共感するところが出てくるんじゃないでしょうか。やはりシンパシーを感じる、ということがあります。フランス語でサンパティークということでもありますけれども、それは心を通じ合うということ、同じ心を持つということではありますが、そのためには、そういうふうに分かる本音をさらけ出した人間同士の、ほんとうの付き合いということ、それをだんだんと覚えていくことじゃないかなと思っています。

【堀田】ありがとうございます。

【加藤】加藤です。今日は、貴重な話をありがとうございました。

意見を通して様々な条例を制定されていますが、どのようにしたら、意欲といいますか、気持ちが出てくるのか教えていただきたいです。

【平井】やはり情熱ということが大切なのかもしれません。また、現場を見るということが、もっと大切なように思います。やはり、世の中にはおかしなことってあるんですね。みなさんも気付かれることがあると思います。ここはこうしたらいいのにな、と思う。その思いがあっても意外に、たとえばルールを作る立場の人が分からない。だから私は、努めているいろんな人の話を聞きに行ったり、現場のほうへ出ていったりします。『踊る大捜査線』で、「事件は現場で起こっているんだ」——あれです。やはり、それがまず第一歩だと思います。

あとはやはり、新しいことを始めようと思いますと、ものすごい抵抗があるんです。それには、信念をもってあたる。情熱をもってあたる。そして説得をする。正しいことであれば、世間は変わります。私がよくやりますのは、アイデアがありますと記者会見の場で、オープンの場で、ワアーツと言うんですね。メディアのみなさんが書いてくれます。そうすると、その反応がくるんですね。これはちょっとマズイかな、というのは修正しなきゃいけませんけれども、意外に、さっきのドラッグの話もそうなんです。全国紙も可と書いたんですよ。一地方のそういうアイデアを。それぐらい、けっこう支持されると思えば、これはもう厚労省が何を言っ

ても、これはやろう、というふうに思うわけですね。こういうことでありまして……。

マックス・ウェーバーという人がこういうことを言っているのです。「政治というのは、情熱と知識をもって、分厚い木に、グリッグリッと歯を当てて穴をあけていくようなものだ」と、いうふうに言っているんですね。まさに、そうだと思います。なかなかいっぺんにできないことであっても、誰かが始める。勇気をもって行動を起こすこと、それが大切だと思っています。

【加藤】ありがとうございました。

【司会】ほかに。はい。

【諸崎】諸崎といいます。お時間をいただき、ありがとうございます。

お話をさせていただいている間の中で、「わが県が最初にやったんだよ」とか「そういうのが一番、ナンバーワンでしたよ」というのが、けっこうお話で上がっていたと思うんですけど、フットワークが軽いというか、あと情報を仕入れるのが早いようなふうな印象を抱いたんですけども、そういうふうに思ったりする時とかあると思うんですけども、そういうのって、たとえば誰かから訴えられたりとか、あと自分で考えたりすることとか、そういうのって、自分で考える、そういう発想があるのかな。それとも、訴えとかから発想を得たのかなと、少し気になったので質問させていただきました。

【平林】諸崎さんがおっしゃるように、やはりスピード感というのが大切だと思うんですね。最近、東京と鳥取とよく対比されるように急になってきて、ちょっと驚いているのですが。東京だと、たとえば職員の数が多いですよ。鳥取県の県庁という職員は、全部で3000人弱ですね。2900人。東京都の税金をとる職員だけでも3300人から。3000人を超えているんです。それぐらい大きな組織なんですね。大きな組織は、それはパワーはたしかにあるんでしょうし、あっちもこっちも縦断的にダーツとやることができるんだと思います、ローラーで。しかし小回りという点では、小さい組織には、そこに有利性があると、私は信じているんです。

今おっしゃるように、たとえば誰かが、住民の方で「これはおかしいな」と声。これが小さな地域ほ

ど届きやすいですよ。私も、それはなるほどなと思うことがある。それから自分でも信念を持って、これはこういうふうにしたほうが良いと気付いたことがあれば、それは即、組織の中で話をさせてもらって、これはやるべきだとなれば実行をする。そのタイミングがおそろしく早いと思います。

最近、企業誘致などもいろいろとさせていただいているのですけれども、そういうところでも、いろんな地域の方々がびっくりされるのは、ようは私が入って、相手の社長さんがいて、何人かで話し合っても「こういうふうにしよう」と言ったら、そのとおり私は議会に出しますから、そのまま予算案で。そういうところは、やはりほかの地域では絶対にできな

いというふうに思います。

だから、小さいことは決してハンディキャップではない、というふうに最近思っていますね。そんな小のメリットを活かすことができれば、それは大きな地域をとおして、我々はチャレンジしていける、と思っております。

【司会】もっと質問を受けたいのですが、時間がきてしまいました。

では、感謝の意を込めまして、花束を。

【平井】どうもありがとうございます（拍手）。

【司会】どうもありがとうございました。では、これで第1回人間情報学部の講演会を終わりたいと思います。